

氏 名	松本 訓枝
学 位 の 種 類	博士（文学）
学 位 記 番 号	第 5225 号
学位授与年月日	平成 20 年 6 月 30 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当者
学 位 論 文 名	「不登校」児家族の変容過程とセルフヘルプ・グループの役割 —「不登校」児親の会を手がかりにして—
論文審査委員	主 査 教授 土屋 礼子 副 査 教授 谷 富夫 副 査 教授 湯浅 恭正 副 査 大阪樟蔭女子大学学長 森田 洋司

論 文 内 容 の 要 旨

「不登校」研究において、「不登校」児家族は「原因としての家族」「治療される対象としての家族」としてみなされる傾向にあり、「不登校」児の母親/父親たちの主観的現実は明らかにされてこなかった。こうした中で、本稿では、母親役割と父親役割というジェンダー役割の視座から母親/父親たちが捉えた「不登校」児家族の実態を、「不登校」児親の会へ参加する母親/父親を対象にして得られた聞き取りデータと親の会における参与観察をもとに明らかにする。その際には、「不登校」児親の会の役割をセルフヘルプ・グループの観点からも考察する。

本稿は三部構成である。第Ⅰ部の第 1 章では「不登校」研究のレビューを行い、これまでの研究においては主に「不登校」の原因を追究することが課題とされてきたことを指摘する。第 2 章では、セルフヘルプ・グループの特徴とセルフヘルプ・グループ研究の課題を明らかにし、「不登校」児親の会研究の動向を概観することで、「不登校」児親の会のセルフヘルプ・グループとしての特徴と「不登校」児親の会研究の課題について述べる。そして、第 3 章では第 1 章、及び第 2 章を踏まえて、本研究の研究目的と研究方法について提示する。

第Ⅱ部の第 4 章から第 7 章では、母親/父親たちが語る「不登校」問題を母親役割/父親役割の視座から明らかにする。そして、母親/父親たちの「不登校」問題への対処過程を親の会を媒介に親子関係と夫婦関係から明らかにし、会における学習が母親/父親自身の生き方にもたらす意味についても明らかにする。

第Ⅲ部の第 8 章では、第 4 章から第 7 章で明らかにしたことを踏まえて、セルフヘルプ・グループとしての親の会の役割を明らかにし、第 9 章においては本研究で得られた知見をもとに、「不登校」問題とジェンダーとの関連、母親/父親たちが親の会への参加を通して個人化していく過程を明らかにし、現代社会論への接合を試みる。

本研究から、母親/父親にとって「不登校」問題とはジェンダー役割に規定された問題であること、「不登校」児親の会のセルフヘルプ・グループとしての役割には自己変容的機能、社会変革的機能、そして新たに「家族関係変容」機能の存在が明らかになっている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、「不登校」児の親の会をセルフヘルプ・グループとしての機能から検討することにより、従来、「不登校」の原因であり、また治療される対象として見なされがちであった家族を、ジェンダーの視点を基軸に、母親役割及び父親役割から見た「不登校」問題への主体的な取り組みを論じ、親の会による学習効果が家族関係のレベルまで波及する過程を実証的に明らかにしようと試みたものである。このような実証研究は、家族と家族外のネットワークとの相互作用の視点が弱い日本の家族研究においても、今までにない新しい独自のアプローチとして注目される。

本論文の特色は、「不登校」児の親の会へ参加する母親たち・父親たちへの聞き取り調査データを中心に実証的に明らかにしている点である。母親たちは我が子の不登校によって母親役割の遂行不能者として、周囲から阻害された感情を抱くようになること、父親たちは、職業的地位が指導的立場にある場合に自己否定感を持つこと、母親たちが親の会での学習によって不登校児への認識を肯定的に転換し、これによって夫も不登校を肯定的にとらえれば夫との関係は肯定的となり、その逆は否定的になる傾向があること、父親たちの場合には親の会への参加により、子供の意思を尊重すると共に子

供に遠慮する父親にもなること、さらに妻との関係では妻が同様に肯定的な態度で子供に対処しなければ、夫婦関係が危機的状況になることもあり得ること、また、こうした関係性の変容と同時に、親たちは自らの生き方を振り返り、新たな自立の道を模索することも明らかにした。

さらに「不登校」児親の会のセルフヘルプ・グループの特徴として、親たち自身の「自己変容」を促す機能、よりよい学校教育を試行する運動へとつながる「社会変革」の機能があること、また親の会が誘因となって家族関係の変容が進められていることを明らかにした。不登校問題への対処過程で、母親は既存の母親役割をより強く遂行しようとジェンダー役割を再生産させるのに対し、父親は新たな父親像を創出する試みを行っている点を明らかにし、新たな不登校問題へのアプローチを提示する可能性を論じた。

以上のような松本氏の研究は、さまざまな社会問題に対処しようとする当事者の自助グループの実証的な研究としても意義があり、動態的な家族研究および家族外部のサポート・システムの実際の効果の研究としても大いに評価でき、さらに不登校問題へのよりよい支援方法を見いだす基盤を提出することに成功している。なお、この論文では一つの親の会を対象としただけで、他にも多くある親の会を調査する必要がある点は今後の研究課題である。また、不登校に限らず、家族の近代化研究としても発展的な研究が期待される。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに価するものと認められる。